

バクトリア洞窟寺院小考

池 上 悟

1 はじめに

立正大学はウズベキスタン芸術学研究所と提携して、仏教学部と文学部の有志教員による学術調査隊を組織し、2014年から2017年の4年間、Uzbekistan 南部の Surxondaryo 州の州都 Termez 市郊外に位置する Kara-Tepe 遺跡の発掘調査を実施した。

この調査は、立正大学が1960年代に Nepal 王国で釈尊出家以前の城塞である Kapila 城址の探索のために Tilaura-Kot 遺跡を調査して以来、半世紀を経過しての海外仏教遺跡の調査であった。Kara-Tepe 遺跡と Tilaura-Kot 遺跡は、紀元1～3世紀代の Kushan 朝の領域の西端と東端に位置するものであり、この意味においても関係を想起させるものであった。⁽¹⁾

Kara-Tepe 遺跡の調査は、この遺跡を長年継続して調査されてきた加藤九祚氏の後をうけて実施したものである。立正大学調査隊の発掘調査は、専ら調査期間に制限され小規模な調査となったものの、相応の成果を挙げることができ、年度毎に概要報告を刊行してきており、総括報告書も様々な専門分野を総合して編集した。⁽²⁾

Kara-Tepe 遺跡は、Bactria 地方を西に流れる大河 Amu-Darya の北岸に立地する、50年以上の調査歴を有する著名な仏教伽藍遺跡である。Kushan 朝に構築され、6世紀代頃まで仏教寺院としての機能を有したものと考えられている。

遺跡は砂岩を地山とする丘陵上に南丘・西丘・北丘に分かれて展開しており、それぞれに異なる様相を示している。

南丘は平面形が西に開く馬蹄形を呈する、東西240m、南北160mの規模であり、比高は10mほどである。丘の東裾から北裾にかけて回廊状の洞窟を主体として掘削し、この前面に日干しレンガで施設を構築した内容が判明しており、全体が仏教伽藍 (Complex) と呼称されている。この南丘の仏教伽藍を特徴づける回廊状の洞窟遺構を伴う寺院址は、現在は東端部を中心に9ヵ所ほどが調査されているが、南裾にも連続して展開しており、その西端部は近年調査が行われている。

西丘は、南丘の北側70mに位置する東西150m、南北60mの規模であり、比高は8mほどである。北裾を掘削して直線状の洞窟を構築し、この前面に日干しレンガで仏教伽藍を構築している。類似する洞窟寺院は、南丘の遺構中にも確認することができ、回廊状から直線状への洞窟

の変遷が想定される場所である。

北丘は、西丘の北西50mに立地する大規模仏教伽藍遺跡である。中央に20m四方の中庭を有する幅38m、長さ48mの規模の僧院を配置し、この北側に15×16m規模の基壇を伴う大形仏塔、東側および南側にも大形仏塔が位置している。

立正大学学術調査隊が発掘調査を行ったのは、北丘に位置する僧院の西側の回廊地区と、北側仏塔の西側地区であった。僧院の西側の回廊地区では、回廊が北端において西側に屈曲する状態を確認でき、西側地区に一辺32m、

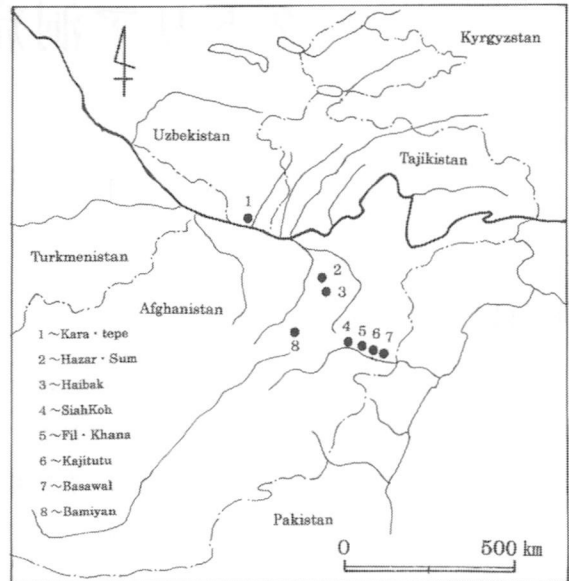
幅5mの回廊が囲繞する状況を想定することができた。東側僧院に先行する西側僧院の存在であり、Kushan朝末期の3世紀代の構築と想定される場所である。北側仏塔の西側地区では、南北に直線状に配置された3基の室に西側で接続する部分から極彩色の壁画の存在が確認され、Kushan朝の1世紀後半代頃の年代が想定されるものであった。

本稿では、立正大学学術調査隊の隊員として直接調査にかかわった Kara-Tepe 遺跡北丘の遺構に関するのではなく、Kara-Tepe 遺跡の仏教伽藍を特徴づける南丘に構築された回廊状洞窟遺構について若干の考察を行うものである。

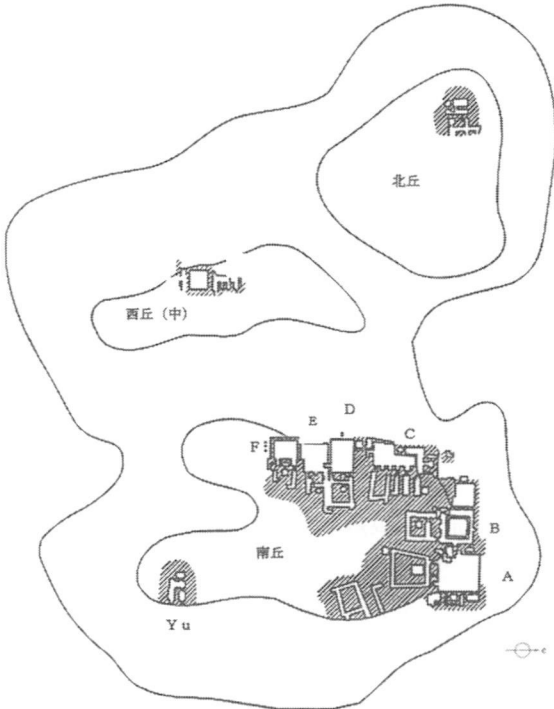
2 Kara-Tepe 遺跡の洞窟遺構

Kara-Tepe 遺跡南丘の調査は、現在も継続中であり、総括報告は果たされていない。現在までに東裾に位置するA・B 2ヶ所の Complex、北裾の東側に連続するC～Fの4ヶ所の Complex、南裾の東側のN 1、N 2の2ヶ所の Complex の所在と、西端部に位置する最新の調査にかかる Complex-Yu が確認できる。

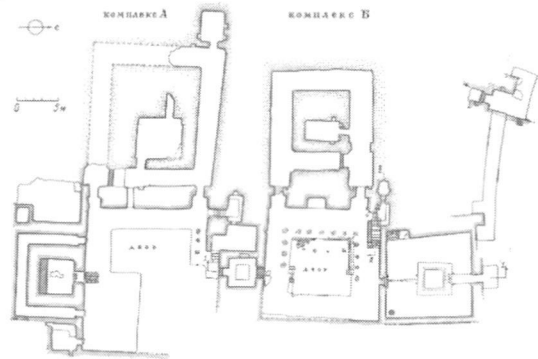
これらのうち、洞窟と前面の伽藍を組合わせた伽藍 (Complex) の復元は、最もよく調査された Complex-B の報告で果たされている。この洞窟遺構は、幅12.5m、奥行15mの規模で幅2.5mの回廊が囲繞するものであり、洞窟への入口は両端部に2ヶ所設けられている。回廊で囲われた内側の規模は7.3×8mであり、この部分に幅3m、長さ4.3m規模の部屋が横から付設されている。回廊洞窟の前面には、幅14.5m、奥行13.5mの前庭が設けられ、周囲の幅3mには礎石を配置して片流れ状の屋根を伴い、正面の龕には仏像が安置されている。ここでは洞窟を主体



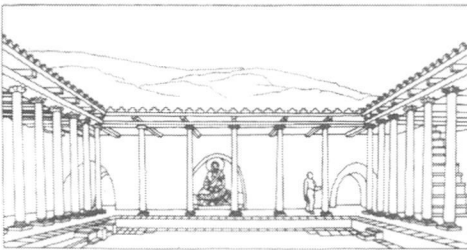
第1図 関連遺跡分布図



第2図 Kara-Tepe 遺跡



第3図 Complex-B



とする伽藍の様相が復元されており、附属施設としては正面右隅に地下に降る2.4m四方の室と、丘陵上部の施設に続く階段が確認できる。洞窟遺構の上部の丘陵には僧房を配置した建物が構築されており、立体的な伽藍構成が窺われる。さらには前庭の隣接部には4 m四方の基壇規模の小形仏塔が配置されている⁽³⁾。

すなわち、入口を2ヶ所有する洞窟を主体とする伽藍構成が復元されるところであり、各部の施設は機能を異にしていたものと判断される。

Kara-Tepe 遺跡南丘における回廊状洞窟を有する Complex は、Bのほかに、A・D・Yuで

確認されるところであり、洞窟寺院の主体をなしている。

一方、回廊状ではなく洞窟の最奥部を屈曲させた「⌈」状の平面形を基本とする Complex も多く構築されている。

Kara-Tepe 遺跡の仏塔および洞窟遺構は、仏教にともなって印度から伝播し来たったものであるが、洞窟寺院のプランは印度の伝統としては異質であり、僧房と回廊を有する建築としてはバクトリア地方に紀元前3～2世紀に現出した Ai Khanoum などの神殿の系譜をひくとの見解が、1961年から1994年までの30年以上 Kara-Tepe 遺跡の調査団長をつとめた B.Stavisky により1983年に示されている⁽⁴⁾。

この見解は1998年にも確認でき、「⌈」状の平面形を基本とする洞窟を構築した Complex-C が古く、回廊状洞窟を構築した Complex-B を新しく考えている。

さらに回廊状洞窟は、その中央に構築された部屋を重視して、四方を回廊で囲まれた礼拝室と考えられている。しかしながら、相対的年代を想定する根拠は明確には示されていない⁽⁵⁾。

同様の編年は、ソ連崩壊後に Kara・Tepe 遺跡の調査を主導した Sh.R.Pidaev によって示されている。「⌈」状の平面形の洞窟をインドの伝統を踏まえた年代的に古いもの、回廊状洞窟をバクトリアの建築的伝統様式によったものとしている⁽⁶⁾。

一方、仏教流布に伴って現出した回廊状の洞窟については、京都大学による Afghanistan Cabul Ravine 各所の石窟寺院の調査の成果として、Fil-Khana 石窟の総括において「繞道窟」と位置づけられている⁽⁷⁾。

ここで対象とされた Fil-Khana 6号窟は、13m四方の内部に幅4mの回廊を巡らし、この周囲3方に10ヶ所の部屋を構築している。また回廊に囲まれた中央には5m四方の方柱が彫り残されており、この故に方柱窟と呼称されている。また Basawal 石窟の報告においては、石窟中の方柱は Stupa として意識されたものと考えられている⁽⁸⁾。

すなわち Afghanistan の各石窟群の中心として掘削された方柱窟は、礼拝の場として塔廟窟として意識されて重要視され、この周辺に多くの衆僧窟が付帯して石窟寺院が構成されたものと考えられている。

仏教流伝の背景を勘案してこの見解に従うならば、Kara-Tepe 遺跡南丘に複数掘削された回廊状の洞窟もまた繞道窟としての機能を果たしたものと考えられることもできよう。しかしながら Kara-Tepe 遺跡の諸例は、Afghanistan 各地に展開した回廊状石窟とは、様相を異にする点も多く観察される。

一つには洞窟規模に関連して、回廊で圍繞された内部の区画が方柱といえるほど小さくない点であり、さらに内部の区画中に部屋を掘削している点である。

ここで、現在知られる Kara-Tepe 遺跡南丘における回廊状洞窟遺構の内容を確認しておきたい。南丘の東裾に位置する Complex-A は、16×17mの範囲に幅2.5mの回廊を繞らし、内部区

画は11.2×12.5mの大きさであり、この部分に幅5.7×5mの部屋を奥に向かって構築している。さらに奥隅に2.8×4mの部屋を設けている。

Complex-B は、12.5×15mの範囲に幅2.5mの回廊を繞らし、内部区画は7.3×8mの大きさであり、この部分に5.3×4.3mの部屋を横方向に構築している。

南丘の北裾に位置する **Complex-D** は、12.5×17mの範囲に幅2.4～2.6mの回廊を繞らし、内部区画は7.3×7.8mの大きさであり、この部分に2.5×3.5mの部屋を奥向きに構築している。さらに奥隅には2.3×2.2mの部屋と、3×2.5mの部屋を設けている。

南丘の南裾東端部に位置する **Complex-N2**は、回廊の概要が確認できるのみであり、13 (11) ×16mの範囲に幅2.4mの回廊を繞らし、内部区画は8×10mの大きさであり、奥隅に小形の部屋が付設されているようである。

南丘の南裾東端部に位置し、1982年から1988年に調査された **Complex-Yu** は、ほかの洞窟遺構の平面形が矩形を呈する点と異なって縦長の長方形を呈しており、両側の洞窟が近年調査されたものである。7×14.5mの範囲に幅2～3mの回廊を繞らし、内部区画は2×8mの大きさであり、奥隅に2×2mの部屋を構築している。

すなわち Kara-Tepe 遺跡南丘に構築された回廊状洞窟は、基本的には内部区画に設けられた部屋を繞る構造になっており、Stavisky により礼拝室と想定された部屋の内部には遺存してはなかったものの、礼拝に値する何物かが安置されていたものと思える。

繞道儀礼は、仏を礼拝する施礼法であり右繞三匝が最上の礼を尽くしたものとされる。『法華経』にその儀礼を見ると、「化城喻品第七」には「其佛未出家時、有十六子其第一者名曰地積、諸子各有種種珍異玩好之具、聞父得成阿耨多羅三藐三菩提、皆捨所珍往詣佛所、諸母涕泣而隨送之、其祖轉輪聖王與一百大臣及餘百千萬億人民、皆共圍繞隨至道場、咸欲親近大通智勝如來、供養恭敬重讚歎、到已頭面禮足繞佛畢已、一心合掌瞻仰世尊」とある。

「從地踊出品第十五」には、「是諸菩薩從地出已、各詣虛空七寶妙塔多寶如來釋迦牟尼佛所、到已向二世尊頭面禮足、及至諸寶樹下師子座上佛所、亦皆作禮右繞三匝合掌恭敬、以諸菩薩種種讚法、而以讚歎住在一面」とある。「妙莊嚴王本事品第二十七」には、「於妙莊嚴王與群臣眷屬俱、淨德夫人與後宮姝女姝眷屬俱、其王子與四萬二千人俱、一時共詣佛所、到已頭面禮足繞佛三匝却住一面」⁽⁹⁾とある。

すなわち釈尊に対する尊敬の礼が窺われるところであり、釈尊没して舍利を奉安した仏塔、ないしは仏像の礼拝にも適用されたものである。

Afghanistan Cabul Ravine 各所の石窟寺院の中には、Fil-Khana、Haibak、Kajitutu あるいは Allahnazar など仏塔と一体となって構成されている事例も多い。すなわち仏塔の所在する丘裾に回廊状洞窟が洞窟寺院の中心として構築されており、窟中の方柱を仏塔に見倣しての圍繞儀礼が実践されたものと考えられている。⁽¹⁰⁾

しかし、Kara-Tepe 遺跡南丘の丘上には、仏塔の存在した痕跡は確認されていない。Kara-Tepe 遺跡における仏塔は、南丘の洞窟寺院の前面に複数の小形仏塔、北丘の平地伽藍に大形の方形基壇を伴う仏塔が3基構築されている。

この事実をもって考えれば、Kara-Tepe 遺跡南丘の伽藍構築時には、回廊状洞窟の内部区画に設けられた部屋には、本来は仏像が安置されていた可能性が高いものと考えられよう。

Kara-Tepe 遺跡南丘に構築された洞窟遺構は、さまざまな様相を呈示している。石窟の内部区画に部屋を付設した Complex-A・B・D のほかに、Complex-Yu では内部平面形は長方形に転じており、内部区画に部屋を伴ってはいない。この段階では、圍繞行為は可能であっても礼拝対象は不明となっている。

Complex-C 西側の区画は2ヶ所の幅2.7mの直線状の洞窟が奥で接続するものであり、奥行は18.5mと20mである。この段階は洞窟入口2ヶ所の基本を保持しており、洞窟内部のみでの圍繞行為はできなくとも、外部を含めれば圍繞行為の実践は可能なものである。内部の部屋に代わっては、2ヶ所の入口間の龕部が機能を果たしたものと思える。

Complex-F では、2ヶ所の幅2m、奥行11.5m、10mの洞窟を構築している。しかし洞窟は内部で接続せず平面形は「」の相対するものであり、2ヶ所の洞窟入口間には2.5m四方の部屋を設けて前側を囲っている。この形状は回廊に囲われた部屋を意識した構造と考えられる。

Complex-E では洞窟は2ヶ所設けているが内部で接続してはおらず、圍繞行為はできない。西側洞窟は幅2m、奥行き9m、東側洞窟は幅2.2mで奥行15.3mの規模で最奥部を3.5m屈曲させて部屋とし、さらに手前に長さ6m洞窟を派生させて奥に2.2m四方の部屋を造作している。これは洞窟内部での圍繞行為はできないが、礼拝対象を安置可能な構造ということができよう。

Complex-Yu の両側に位置する洞窟では、東側洞窟は幅2mで奥行11mであり、最奥部を2m屈曲させて部屋としている。西側洞窟は、幅2m、奥行10mの洞窟の中途に左右4ヶ所を幅2m拡幅しているものの、部屋構造を呈してはいない。

Complex・C 東側区画は直線状の洞窟を3ヶ所掘削するものであるが、わかる範囲では最奥部を横に広げている。また前庭には連弁状装飾を施した基台を有する小形の仏塔が構築されており、前庭における仏塔構築の場もまた内部洞窟の簡略化に従って特別区画を確保しない状況を現出している。⁽¹¹⁾

以上 Kara-Tepe 遺跡南丘に構築された洞窟遺構を、本来の圍繞儀礼実践を基本とする構造からの乖離を視点としての変遷は以下の如くに想定できる。

1期：一辺17m規模の正方形平面で幅2.5～3mの回廊を繞らし、内部区画中に部屋を構築した
Complex-A・B・D

2期：長方形を呈する洞窟内部の圍繞は可能であるものの、内部区画に部屋を構築しない Complex-Yu と、平行する洞窟が奥部のみで接続する Complex-C

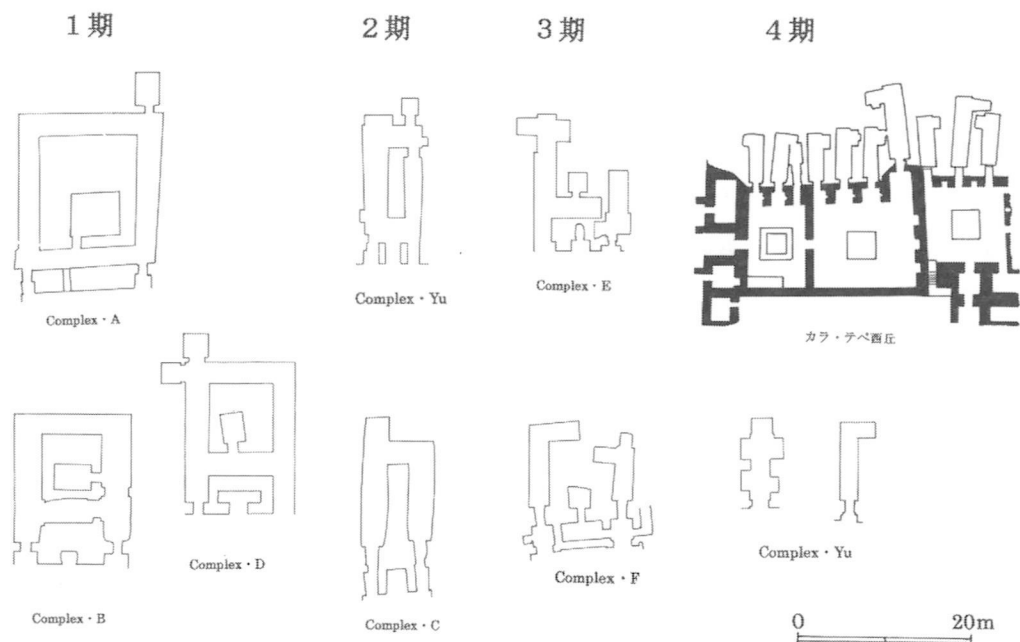
3期：洞窟内部の圍繞は不可能な構造であるが、洞窟入り口2ヶ所を保持し内部に部屋を構築した Complex-E と、外部に部屋を構築した Complex-F

4期：直線状の洞窟の最奥部を屈折させて部屋構造とする Complex-C 東側区画、Complex-Yu 東側区画と変形例

この洞窟遺構の変遷想定もまた具体的な年代的根拠のない点において、既存の変遷案と同じであるが、いくつかの根拠に基づいている。一つは繞道儀礼の実践を可能とする回廊状洞窟の簡略変遷の型式学的検討であり、回廊状洞窟から「[」状洞窟への変遷は中間過程の存在により想定し得ても、この逆の変遷はなりたたない点である。

この点は、個別洞窟遺構の立地からも首肯される場所である。Kara-Tepe 遺跡総体では、南丘の比高が最も高く10mほどであり、西丘は北に連なる低丘である。洞窟を掘削する場合にはより厚い砂岩堆積の確認される南丘から開始されたものと考えられるところであり、回廊状洞窟は南丘のみに構築されている。

また東西に主軸を採る南丘における個別洞窟遺構の配置では、東裾に回廊状洞窟の Complex-A・B、南裾に Complex-N1が配置されており、Old Termez の街に向いている。さらに隣接洞窟遺構の関連では北裾に開口する Complex-D の両側に直線状洞窟への変遷形を示す Complex-C・E・F が配置されており、北に続く西丘に掘削された直線状洞窟への連関を示しているものと考えられる。



第4図 洞窟遺構編年図

洞窟寺院の構成要素の一つとして、建立された仏塔の配置も、特定区画における建立から前庭への付設という変遷が、回廊状洞窟から直線状洞窟の変化に対応している。

これらの点に基づけば、回廊状洞窟を古期とする変遷も首肯し得る想定として位置づけることができよう。

3 石窟寺院の系譜

Afghanistan Cabul Ravine 各所に構築された仏教洞窟寺院の所産年代は、必ずしも明確になっていない。Fil-Khana 石窟においては、寺院を構成する仏塔の様相から Kushan 朝（1～3世紀）の所産と想定されている。

すなわちこの段階で回廊周囲に10カ所の僧房と考えられる部屋を付設した回廊洞窟が、印度における洞窟構築法をうけて現出したものとされる。

また Basawal 石窟群では出土した仏像の特徴などから400年から500年頃の所産と推定されており、他の仏教石窟群では年代は論及されていない。

また Afghanistan Cabul Ravine における方柱石窟の変遷は、「ジェラーラーバードの石窟」の総括で、「フィール・ハーナ第六洞がはやく、シア・コー石窟A群第一洞がこれにつぎ、それについてB群第四洞、C群第三洞、パサーワルの諸石窟がつくられたといへよう」と想定されている。⁽¹²⁾

Kushan 朝（1～3世紀）の所産と考えられる Fil-Khana 第6窟は、13m四方の内部に幅4mの回廊を巡らし、この周囲3方に10カ所の部屋を構築している。また回廊に囲まれた中央には5m四方の方柱が彫り残され方柱窟となっている。

Fil-Khana 石窟は丘陵上に仏塔を築造しており、近接して3基の石窟が構築されている。また裾部に3ヶ所に分かれて石窟群が造営されており、このうち東方群に9基存在しており、方柱窟の第6窟はその中心を占めている。中央群には長方形平面を基調とする13基、西方群には隧道で接続された大形の6基の石窟が造営されている。⁽¹³⁾

この石窟に設けられた僧房としての衆僧窟、さらに圍繞儀礼が行われたであろう方柱窟によって構成されており、印度の僧衆窟（vihara）を受容するに当たって、中央を彫り残して方柱窟が現出したものと考えられている。

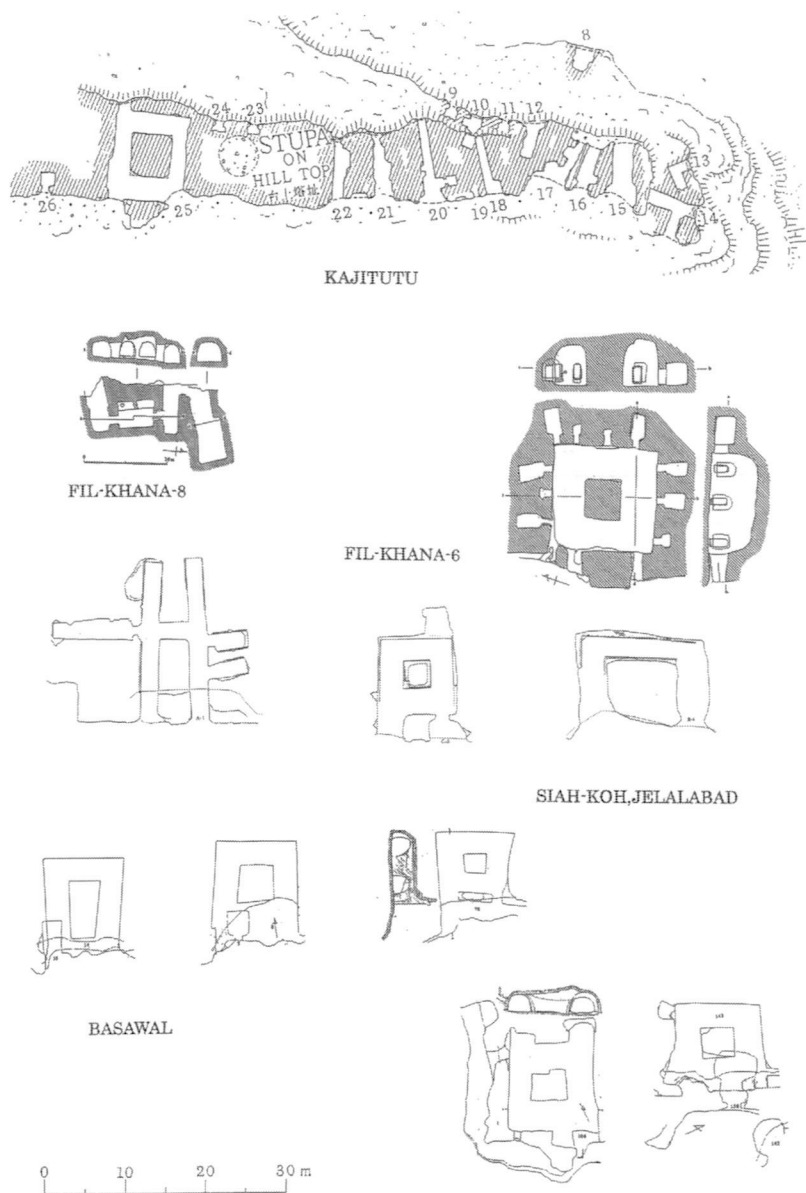
Siah-Koh 石窟群は、隣接する3ヶ所の石窟群であり、A群は長方形平面の5基の石窟と特異な構造の1号窟からなる。1号窟は幅2.5m、長さ20mの石窟が平行して掘削され、これが内部で接続し3ヶ所の部屋を造作した特異な構造の石窟である。

B群は長方形平面石窟3基と、4号方柱窟からなる。4号方柱窟は、幅15m規模で幅4mの回廊が繞るものであり、方柱は8.5m四方である。C群は長方形平面石窟3基と、3号方柱窟からなる。3号方柱窟は幅18m、奥行19m規模で回廊が繞るものであり、中央部の方柱は6×7

m規模である。⁽¹⁴⁾

これら3群に分かれて造営された Siah-Koh 石窟群は、小規模ではあるが方柱窟を中心として衆僧窟を配置する構成であり、よく方柱窟の性格を想定させる事例といえよう。

Basawal 石窟の方柱窟は、前部の崩壊している事例が多いが、7基の所在が報告されている。石窟規模は幅6~11m、奥行6~12mであり、内部に彫り残された方柱は2.5~6m四方であ



第5図 Cabul Ravine 石窟集成

り、一例は3×7mである。石窟群の中には仏像を安置して礼拝の対象としたと想定される尊像窟も多く構築されている⁽¹⁵⁾。

すなわち示された方柱窟の変遷は、印度の形成を保つと考えられた複数の部屋を付設する構造を古期、部屋付設をしない単純構造の方柱窟を新期とし、小規模の事例を最新に位置づけたものと確認できる。

この変遷を基にすれば、Kara-Tepe 遺跡の繞道儀礼の実践が想定される回廊状洞窟遺構はどこに位置づけられるであろうか。回廊状で奥隅に部屋を付設する点を重視すれば Fil-Khana 6窟から Siah-Koh 石窟群への変遷の時期に平行するものと想定されよう。これはすなわち、Kushan 朝のうちの變遷と考えることができよう。

4 Kara-Tepe 遺跡の洞窟寺院

Kara-Tepe 遺跡の造営年代については、調査が継続中であり、総合的な報告は果たされておらず、個別遺構ごとのより詳細な変遷は研究途上である。立正大学学術調査隊が発掘調査した北丘の西側遺構においては出土した炭化物および動物骨片の放射性炭素（C14）年代の分析を行い、遺構変遷の基準を確定することができ、遺跡の年代推定に画期的な成果を加えることができた。

南丘においては、出土人骨の確認によって寺院機能の終末が論じられている。すなわち Complex-A の前庭に構築された僧房施設内に埋葬された20体ほどの人骨に伴い出土したコインの検討により、埋葬が4世紀後半代に行われたことが想定され、この時点では仏教伽藍としての機能は喪失していたものと考えられている。

この点を踏まえて、Kara-Tepe 遺跡南丘遺構の造営は出土したコインおよび彫刻類の特徴によって、Kushan 朝の2世紀前半代に開始され、4世紀代頃から徐々に衰退し、6世紀代に再び活動を開始したことが纏められている⁽¹⁶⁾。

すなわち上に記した洞窟遺跡の変遷は200年ほどの時間的経過をもって果たされたものと考えられるところである。洞窟内部における圍繞行為は僧侶の修行行為であり、洞窟遺構はすなわち修行窟であったものと考えられよう。

Kara-Tepe 遺跡の北方約1kmの平地部には著名な Fayaz-Tepe が所在している。幅約34m、長さ120mの僧院は機能を異にする3区に分かれ、尊像を安置した中央区画に並置して一辺18mの基壇上に仏塔が建立されている。この仏教伽藍遺跡は、Kushan 朝のうちでも早い1世紀代に創建され4世紀代に及ぶものと考えられている。

さらには、Kara-Tepe 遺跡の南方1kmに隣接する、Kushan 朝の年代が考えられる Chingiz-Tepa からも仏教遺構が確認されている⁽¹⁷⁾。

また、Kara-Tepe 遺跡とは Old Termez を挟んだ東南約6kmの地点に大形仏塔の Zurmala

Stupa が所在している。方形基壇の上に径約15m、高さ13mの円形仏塔が遺存しており、Kushan 朝の Kanishka I 治世の2世紀代の建立とされる。立正大学学術調査隊は2018年、2019年の2ヶ年にわたって周辺部の発掘を行い、周辺部における遺構の存否確認を行うとともに、仏塔造立の基盤層を確認した。⁽¹⁸⁾

これら Kara-Tepe 遺跡、Fayaz-Tepe、Chingiz-Tepa、Zurmala Stupa の、至近の距離にある仏教遺跡の建立の基盤は Old Termez に居住した仏教信者であり、個別に存立したものは考えられない。洞窟寺院である Kara-Tepe 南丘・西丘の遺構、平地寺院である Kara-Tepe 北丘の伽藍と Fayaz-Tepe の伽藍は、変遷しながらも共存したものであり、機能を異にした施設であったものと思われる。

さらには Zurmala Stupa は、Termez の街の仏教伽藍の表徴としての機能を有して建立されたものと思える。相互の有機的関連性の追及も、今後の重要な研究課題と認識されよう。

立正大学のウズベキスタン学術調査隊は、専ら仏教学部の法華経文化研究所所長をつとめられた安田治樹教授の教導によって実現したものであった。これを仏教学部の手島一真教授と、文学部の岩本篤志講師が補佐して開始された。池上は発掘担当として参加したものの偏執的な地元研究者によって十分な調査を実現することはできなかった。この故に Kara-Tepe 遺跡の調査を4年で断念して Zurmala Stupa の調査に移行したものであるが、これも安田教授の意向に従ったものである。

定めにより大学の専任職を辞されるとはいえ、今後継続される調査にも係わって遺跡調査の方向を見定めて欲しいと思います。

Kara-Tepe 遺跡南丘の洞窟遺構の確認と略測は、2015年の Kara-Tepe 遺跡の調査に参加した岩本篤志・足立佳代両隊員の協力の下におこなった。また本稿を草するにあたっては、立正大学文学部の瀧口美佳講師に御世話になった。あわせて謝意を表したい。

註

- (1) 中村瑞龍・久保常晴・坂詰秀一『ティラウラ・コット』I 立正大学 平成12年
中村瑞龍・久保常晴・坂詰秀一『ティラウラ・コット』II 立正大学 昭和53年
坂詰秀一編著『釈迦の故郷を掘る』北隆館 平成27年
- (2) 立正大学ウズベキスタン学術調査隊『カラ・テペ遺跡—2014・2015・2016・2017年度調査概要報告書—』
2015・2016・2017・2018年
- (3) Kara-tepe I The Kara-tepe Buddhist Cave Monastery in Old Termez, Moscow 1964
Kara-tepe II Buddhist Caves on Kara-tepe in Old Termez, Moscow 1969
Kara-tepe III A Buddhist Religions Centre on Kara-tepe in Old Termez, Moscow 1972

- Kara-tepe IV New Finds on Kara-tepe in Old Termez, Moscow 1974
 Kara-tepe V Buddhist Monumentts on Kara-tepe in Old Termez, Moscow 1996
 B.Gafurov, M.Asimov, G.M.Bongard-levin and Others Kushan Studies in U.S.S.R. 1970
 Boris J. Stavisky "Buddha-Mazda from Kara-tepe in Old Termez" The journal of the International Association of Buddhist Studies 1980
- (4) B.Stavisky Kara tepe in old Termez a Buddhist religious centre of the Kushan period on the bank of the Oxus 1983
- (5) B. スタヴィスキ 「カラテパ南丘の発掘」『アイハヌム2007』東海大学出版会 2007年
- (6) Sh.R.Pidaev 「展示品の出土概観」"Outline of the excavation" 『ウズベキスタン考古学新発見』東方出版 2002年
- (7) 水野清一・樋口隆康編『ハザール・スムとフィル・ハーナ』京都大学 1967年
- (8) 水野清一編『バサーワルとジェラーラーバード・カーブル』京都大学 1971年
- (9) 大正一切経刊行会『大正新脩大藏経』（全88巻）1924-1932年
- (10) 水野清一編『ハイバクとカシュミール・スマスト』京都大学 1962年
- (11) 加藤九祚「中央アジアの仏教と遺跡」『佛教芸術』第205号 1992年
- (12) 水野清一編『バサーワルとジェラーラーバード・カーブル』京都大学 1971年
- (13) 水野清一・樋口隆康編『ハザール・スムとフィル・ハーナ』京都大学 1967年
- (14) 水野清一編『バサーワルとジェラーラーバード・カーブル』京都大学 1971年
- (15) 水野清一編『バサーワルとジェラーラーバード・カーブル』京都大学 1971年
- (16) 岩井俊平「バクトリアにおける佛教寺院の一時的衰退」『東方學報』第88号 2013年
- (17) 岩本篤志「アムダリヤ中流域における仏教遺跡と研究の現状」『カラ・テベ遺跡—2014年度調査概要報告書—』立正大学ウズベキスタン学術調査隊 2015年
- (18) 立正大学ウズベキスタン学術調査隊 『ズルマラ仏塔発掘概要報告書2018』2019年

Summary

Alteration of Bactrian Cave Monastery

Satoru IKEGAMI

Kara-Tepe is a famous Buddhist site situated at the outskirts of Termez city in the Surkhandarya province of Uzbekistan. It was first excavated about 50 years ago. A research party from Rissho University performed an excavation at the Western district of the Northern Hill site of Kara-Tepe between 2014 and 2017. Through this, considerable results were obtained.

In this paper, I observed the changes in Kara-Tepe's cave monastery, especially paying attention to the plan of the caves. Resultingly, the cave's corridor changed its straight-line-shaped plan. This change of plan assumed that the alteration of the circle ceremony (pradaksina) —which is strictly a practice to brevity act—is reflected in the plan.